

沼津市 若山牧水 記念館

第75号 令和7年9月1日

編集・発行
〒410-0849

公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>

幾山河こえさりゆかば寂しさの はてなむ国ぞけふも旅ゆく 牧水

若山牧水の短歌として、最初に浮かぶ短歌のひとつではないだろうか。また、この短歌の歌碑は全国に十を超えて建てられている。

伊藤一彦氏が『エッセンシャル牧水』（二〇一九年田畑書店刊）で

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

の歌とともに

短歌に縁がなくてもこれらの歌を知らない人は少ないだろう。どちらも牧水が二十代初めの作である。二首ともイメージは鮮やかである。青い空と海にうかぶ白鳥、いくつもの山と川を越えてゆく旅人。ただ、地名は出ていない。季節も示されていない。作者の年齢も境涯も不明である。ということは、読者が思い思いのイメージで作品を味わえるということだ。この二首が愛誦歌として広く人口に膾炙しているのはそのこ



とが大きい。もちろん、愛誦歌であるためには調べがよいことが絶対条件としてあるが、その点でも五七調のゆつたりとして豊かな調べは申し分がない。口ずさんでみればよくわかる。

と解説している。
掲出の半切は、今年、神戸市の佐野忠平様のご遺族から寄贈されたもので、通常の半切よりも一回りほど小さい本紙に丁寧な書かれていて、無地の天地に、一文字・風帯は綴子、軸先は堆朱とこだわりのもった表装になっている。入手経緯はわからないとのことだったが、昭和三十九年一月に喜志子夫人に半切の箱書きを依頼して、夫人から「紛れもない真蹟であることを確認いたしました」と返事があり、「まことに結構の出来栄で揮毫の年月は大体大正三十四年のものと確定して間違ひなからうと存ぜられます」と続いている。

大正十三年、十四年は、牧水が沼津への永住を決意し、雑誌発行の事務所を兼ねた家を新築する資金調達のため揮毫頒布会を企て、十三年に第一回の頒布会を沼津で開催。その後、夫妻で全国的に行脚をはじめている。そして十四年一月には大阪で「揮毫頒布会」を開催し、京都、神戸と回っている。

ご寄贈いただいた佐野忠平氏は、大正九年生れということなので、直接「揮毫頒布会」で購入したわけではないだろうが、巡り巡って佐野氏の手許に届き、そして今回沼津に届いたことになる。

牧水三題

沖 ななも



『みなかみ』

牧水の本筋と少し違うかなあと思いつつ筆を進めていく。私自身が牧水としてイメージしている作品とは違った面を、逆にとても面白く思っているからだ。

① いたずらか？

きゆうとつまめばぴいとなくひな人形、
きゆうとつまみてぴいとなくする

『みなかみ』

雛は、仕舞うとき首を外すことがあったのでそれで音が出るのかもしれない。古い雛にはそんなこともある。あるいは触ると音の出る仕掛けになっているのかもしれない。私の子どもの頃、雛ではなく抱き人形だったが、

お腹を押すと音が鳴る人形を持っていたことがある。

牧水らしくない歌と思うが何だか身近に思えて、かえって好きだった。

牧水はオノマトペのようなものはほとんど使わない、「きゆう」とか「ぴい」とか。

穴^すだらけのわが心のその穴^すにこの穴^すに小鳥^なが眼^めを出しぴいとなき、ぴいと啼^なく

『みなかみ』

こんな歌もあるにはあるが。

また、リフレインと言ってもいいかと思うが、同じ言葉を繰り返している。こうした技法はあまり使わなかったのではないか。この繰り返しによって、リズムが軽くなつて滑稽な感じさえる。

雛人形というのだから姉たちのものか。女の子の人形を男の子が悪戯するということはしばしばあった。そんな悪戯つ子の様相が面白く思つて読んでいた、牧水の悪戯と。

滑稽ないたずらの場面として読んでとても面白くて好きだった。牧水の自然詠とは違つ

た一面を持っていたし、どこにでもいる悪戯つ子、女の子をいじめているような場面。無邪気な感じがしていた。

二〇二五年三月の「雛の歌会」では、この歌をデザインしたトートバックを持っていた方がおられた。トートバックに使いたくなるような楽しい歌だということでもある。

しかし一首だけ取り出してみると、一連の中にあるのとを比べて考えてみると、そう単純ではないように思える。

歌集『みなかみ』は、扉に「本書を亡き父に捧ぐ」とある。父親を失った悲しみばかりではなく、家の後継ぎとしての重責、自由に生きたいというジレンマなどで、鬱々としていたのではないか。

そう思うと何やら単純な悪戯ではなさそうに思えてくる。姉たちへの思い、伝統への反発などの鬱屈した思いが形になったのではないかと。

② 破 調

私の師は加藤克巳といって牧水の孫弟子にあたる、らしい。つまり加藤克巳の旧制中学の先生に高橋俊人、希人さんがいて、短歌の手ほどきを受けた。その二人が牧水の弟子だったことから孫弟子ということになる。

加藤克巳は、短歌の中でのいろいろな冒険をした。口語はもちろん、四九音ある歌、一七音の歌なども作った。破調もあった。牧水の系統とは思えないのだが、牧水にもかなり破調の歌があつて、このあたりの自由さを学んだのか、などと勘繰っている。

前の歌に近いところ、父の病のあたり、故郷に帰ったころの歌に破調の歌がある。

さうだ、あんまり自分のことばかり考へてゐた、四辺は洞のやうに暗い

『みなかみ』

全く自由な絶対境がないものなら、斯うして眺むる薔薇はうつくしい

『みなかみ』

じいつと薔薇に見入るころ、じいつと自分に親しもうとする心

『みなかみ』

散つてみれば案外な花弁の大きき、薄き、紅き、冬の夜の机の薔薇

『みなかみ』

飛ぶ、飛ぶ、とび魚がとぶ、朝日のなかをあはれかなしきころとなり

『みなかみ』

主観的に読めば、自分のことばかりを考えていたというのは家族関係のことだろうし、全く自由がないというのも家との関係だろうと思えるが。

人生で一番苦しかった時期なのではないだろうか。自分の生き方を通すか、我儘なのではないか、家族の望みはどうなのか、と。

この時代の男性の多くは悩んでいる。家族制度があり、家長というものが厳然としていた時代。家族・一族を家長として守らなければならぬ。古泉千樫などもそうだった。幸い弟が継いでくれたなどという例はいくらでもある。

そうした迷いのなかで本音を言おうとする破調になる。あるいは破調を厭わない。形式だけに拘るのではなく、言うべきこと、表現すべきことを優先するということだ。率直に、と言うのは易しいが、いざ表現すると案外難しいものだ。なぜなら自分の感情などは自分でもはつきり掴めないことがあるし、整理できないことだからだ。いま思つたことが何秒か後には違つたものになったりする、その瞬間を掴まえることに他ならないから。

これらは父の病のために帰郷した時だからとくに破調が多いのかもしれないと思うが、それに先立つた歌の中にもある。

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ旅人の身に前後あらすな

『路上』

出づるな森を、出づるな森を、死せるるときその顔を保て、出づるな森を

『死か芸術か』

これらは旅の途中か、^{あいだあいだ} 間間の歌なのである。一首目は信濃浅間山の麓、次の歌は相模の歌に続く甲斐の歌の間の時期か。

家族との関係ではなく、旅の途中でも、自然詠ではない、心の叫びのような歌がある。主観的に言えば、止むにやまれぬ激情の溢れたような。家族や誰かとの関係ではなく、純粹にどう生きるべきか、旅に生きるのかではなく、旅を通して人間としてどう生きるか。生きることの根本についての苦悩が破調になつて表れたのか。



左から『路上』『死か芸術か』『海の声』『秋風の歌』『溪谷集』『くろ土』『独り歌へる』『山桜の歌』『黒松』

③ 人を捉える

まったくそれとは対極に当たるような歌、写真と言ってしまうばそれまでだが、人間を見る眼、といつてもいい。人間といつても家族や友人ではない、他者、通りすがりの人。その描写がとても面白い。

植木屋は無口のをとこ常磐樹の青き葉を刈る春の雨の日 『海の声』

船酔のうら若き母の胸に倚り海をよろこぶやよみどり児よ 『海の声』

少女子の青パラソルよりなほひろき麦藁帽を着て海に入る 『死か芸術か』

船子よ船子よ疾風のなかに帆を張ると死ぬる如くに叫ぶ船子等よ 『秋風の歌』

ほうほうと声を合せつ空気を送る舟のうへなる潜水夫等の妻 『秋風の歌』

水無月の洪水なせる日光のなかにうたへり麦かり少女 『独り歌へる』

崎山の櫓の木がくり芝道に出であひし海女は藻の匂せり 『溪谷集』

いま入りて来しをみな子が負へる菜に雪は真しろく降りたまりたり 『くろ土』

たぎり湧くいで湯のたぎりしづめむと病人つどひ揉めりその湯を 『山桜の歌』

旅の途中で出会った人たち。たぶんもう二

度と会わない人たちを活写している。無口の植木屋、母親が船酔いに苦しんでいるのに赤子は楽しそう、少女のパラソルと帽子の大ききの比較、船子の子、潜水夫の妻のようすを刈る乙女、海女の藻の匂い、山菜だらうか雪が積もっていた。

おそらくすれ違った一瞬のこと、そんな様子を目に止めている。

あえて言えば労働者と言うべきか。働いている、生活している人たちである。

牧水は、そうした労働をしていない。羨ましいような後ろめたいような、だからこそ、労働する人たちに一目置く。あるいは旅とは違った羨ましさを持っていたのではないだろうか。穿ちすぎかもしれない。しかし労働する人、生活する人の確かな生き方に憧れもあったのにちがいない。

もう一つ、人間ばかりではなく動物にも目を向けている。

まるで馬が寝てをり朝立の酒沸かし急ぐろりの前に 『黒松』

芹の葉の茂みがうへに登りゐてこれの小蟹はものたべてをり 『黒松』

背のいろ落葉にまがひ蜥蜴の子おち葉のなかを行く音寂しも 『路上』

人間と一緒に労働する馬、蟹だつて生きるために何か食べている。蜥蜴の暮らしにも目を止めている。人間と小さな動物とを同じ目線で捉えているのは注目したい。

現代には実業と虚業という言葉がある。実業はともかく、虚業は投資家のような人とか怪しげな人も含むが、いずれにしても利益を上げることを目的としている。牧水は何れでもない。利益を求めてはいない。求道者のようなものかと思う。

家族制度から解放された現代にあつたらどうだっただろう。人は、ある抵抗のなかで文学を生んでいく。

「筆者プロフィール」 おき ななも



昭和二〇年、茨城県古河市生れ。さいたま市在住。歌誌『熾』代表。昭和五八年、第一歌集『衣裳哲学』で第二七回現代歌人協会賞受賞。そのほかの歌集に『機

知の足首』『木鼠浄土』『ふたりごろ』『天の穴』『一粒』『三つ栗』『木』『白湯』『日和』。令和七年三月二日に開催した第三七回「雛の歌会」に、講師としてお越しいただいた。